

# 「中小企業月次景況観測」の見方について

高木 健紀

## 1. 統計の問題点

「10人のエコノミストがいると11の予測がある」というジョークがある程、景気の動向を的確にとらえ予測することは至難のワザである。このように予測が難しい背景として統計自身に問題がある場合も少なくない。

よく使われる景気に関する統計として、「景気動向指数」、「国民総生産 (GNP)」、「各種企業動向調査」がある。前二者 (いずれも経済企画庁) は客観的なデータに基づき信頼性は高いが、公表まで時間がかかる (ほぼ3カ月) こと、企業規模別のデータがないこと、などの制約がある。

後者は企業の自社の景況 (業況) に対する見方がベースになっており利用上自ずと限界はあるが、種々のデータを簡単に且つ早く得ることができる。このように、それぞれの統計には問題点があり、景気の分析に当たってはこれらの指標を総合的にみて判断する必要がある。

## 2. 「中小企業月次景況観測」について

上記のように、主要な景気関連統計に規模別のデータが欠落しているため、中小企業の景況について信頼性の高いデータを得ることが難しい。このため、商工中金では1976年5月から「中小企業月次景況観測 (以下本調査)」を開始した。統計のタイプとしては、「各種企業動向

調査」にあたる訳で長所・短所は上記の通りである。

調査項目は景況判断、売上高、業況判断 (販売価格、採算、製品在庫、生産設備、資金繰り、92年2月から仕入価格、雇用を追加) で、調査対象は商工中金取引先500社 (85年2月から経済のサービス化に対応するため非製造業を300社追加し、製造業350社、非製造業450社の計800社) で、毎月同じ取引先を調査している。

なお、景況判断については、1カ月前の予測指数も併せて調査している。

## 3. 本調査の特徴

景況判断について、本調査の特徴を代表的な同種調査である日銀の「短観」と比較してみると次の二点である。

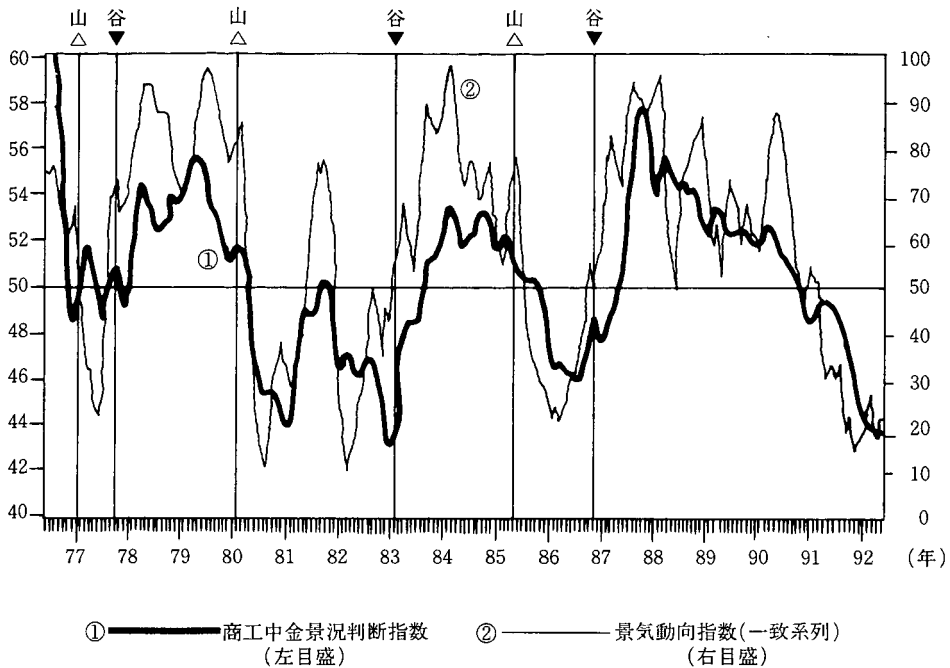
第一に、「短観」は四半期毎の調査であるが、本調査は毎月調査しており、また当月の調査を当月中に発表するなど迅速である。

第二に、「短観」は業況が良いか悪いかという水準を調査しているが、本調査では前月と比べ好転したか悪化したかという変化を調査している。従って、景気の動向に対して敏感に反応する。

## 4. 他の統計との比較

「景気動向指数」と本調査を比較すると図1の通りである。両統計とも指数が50を超える

図1 「景気動向指数」と本調査の比較



(注)：①、②= $[\text{好転社数(系列)} \times 1 + \text{不変社数} \times 0.5] / \text{全体社数} \times 100$  3ヵ月移動平均済

と景気(景況)が好転、下回ると悪化していることを示し、50のラインを切る直前が景気のピーク、ボトムとなる。

特徴的な点を挙げると、第一に、政府が公表している景気の山と両統計のピークの時期がほぼ同じであることである。そして、未公表ながら直近の景気の山は両統計をみると、遅くとも91年半ば以前であったと思われ、かなり以前から景気(景況)悪化のシグナルは出ていた訳である。

第二に、景気の谷と両統計のボトムをみると、本調査のボトムは景気の谷に対して半年程遅れる傾向がある。これは、本調査の対象先に機械関連の下請け企業が多く、景気回復の恩恵を受けるのが遅れるためとみられる。

また、本調査を日銀の「短観(全国企業ベースの中小企業)」と比較すると図2の通りであ

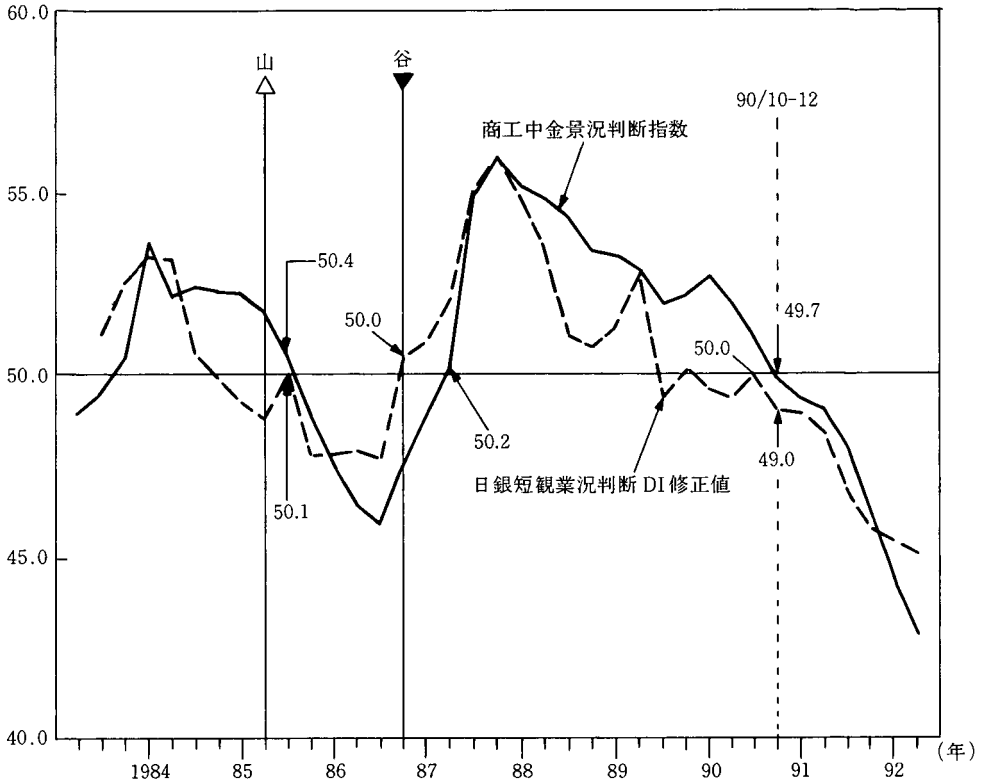
る。基準を同じにするため本調査は四半期ベースにしている。一方、「短観」の業況判断D.I.の方は前期差をとり、指数のベースを合わせるための修正をおこなっている。

特徴の第一は、「短観」がギクシャクした動きであるのに対し、本調査の方が景況の変化を鮮明に追っていることである。ただ、景気の転換点という観点から景況のピークをみると、両統計とも同じである。

第二に、景況のボトムは「景気動向指数」との比較と同様、本調査の方が半年程遅れている。この差異は、本調査が機械関連の下請け企業が多く、「短観」の方が機械関連以外の業種のウェイトが本調査より高いためとみられる。

因に、本調査の調査対象企業数は「短観」の約3,600社に比べかなり少ない。ただ、上記のように、他の景気(景況)関連統計と比較する

図 2 「短観」と本調査の比較



(注) 「日銀短観」業況判断 DI は、水準を示すものであるため、変化の方向を示す値に修正した。  
 修正値 = (DI 前期差) × 0.5 + 50

と、大筋ではほぼ似たような動きをしている。これは、本調査は悉皆調査であることから統計の継続性が保たれているためであり、統計の信頼性は高いものと判断される。

### 5. 中小企業の景況の現状

本調査でみると、中小企業の景況は前回の円高不況以上の悪化が続いており、厳しい状況に

ある。

ただ、このところ指数の水準は横ばっており、一段と中小企業の景況が悪化する様子はみられない。また、景況判断指数の実績と予測の乖離をみると、予測の下方修正幅が小さくなってきており、過去の経験からみると早晚、中小企業の景況は50のラインに向かって動き始めるものとみられる。

(たかぎ たけのり)  
 商工中金調査部